

綴葉

て
い
よ
う

'23

1
2

No.414

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

アーロン・バナナフ著、佐々木隆治訳『オートメーションと未来の労働』

牛腸茂雄著『牛腸茂雄全集 作品編』

特集／自伝・評伝

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ.
CO-OP

京大生協
綴葉編集委員会

雇用劣化の真の要因はA-1か？

労働社会の未来を考える

オートメーションと 未来の労働

アーロン・ベナナフ著
佐々木隆治訳 堀之内出版



「A-1が仕事を奪う」——こんな言葉を耳にしたことはないだろうか。つい先日にも象徴的な出来事があった。高クオリティなイラストをものの数秒で生成するA-1が誰でもアクセス可能な形で公開され、インターネット上のイラストコミュニティで動揺と議論が巻き起こされたのだ。自分の絵に価値がなくなること恐れる人、これからはA-1を上手く活用して絵を描くことが重要になると考える人、イラストの枠を超えたエンタメがますます加速すると予測する人、綴葉読者はどのような未来を予想するだろうか。

学者や政治家、シリコンバレーのエリートたちの間で主流なのは、既存の仕事が高度なA-1を組み込んだコンピュータソフトやロボットに代替され、人間の仕事が無くなり失業が蔓延するという暗い未来予想図だ。そうなれば人々はもはや雇用されることができないため、ユニヴァーサル・ベーシック・インカム（UBI）が必要になると言われている。左派の論者の中にはこうした状況を逆手に取り、オートメーション化の波を裕福なコミュニティズムへの追い風と見る者もいる。しかし、事はそう単純ではない。

ベナナフは本書において、左右両方のオートメーション言説が技術決定論に依拠していることを批判する。ベナナフによると、雇用

減少の原因は生産性の急激な上昇ではなく、経済全体の生産量の伸び率が生産性の伸びよりも早く減少したことにある。問題は製造業が牽引していた資本の利潤率が低下した結果、資本が金融に逃避して、実体経済への適切な投資が行われなくなったことなのである。

ベナナフはさらに、失業は黙示録的に訪れるのではなく、サービス業における不安定就労（半失業）の広まりと、労働者階級全体の相対的窮乏化（不平等の拡大）という形を取ると予想する。口を開けてUBIを待っていても、経済的不平等や資本・労働関係に影響を与えるほどの金額が給付される可能性は低い。ベナナフの未来図はともするとオートメーション論よりもさらに陰鬱だ——投資決定に対する支配力を少数の資本家の手から奪い、熟議によって技術と所得を適切に配分するために、人々が立ち上がらない限りは。

本書は、著者の現状分析と未来予想、既存の理論の批判的検討、変革の提案と新しい社会のビジョンから構成されており、明快な主張を軸に手際良く議論が展開されている。そのため、これまでオートメーション論に触れたことがない読者であっても理解しやすく、むしろ「A-1と仕事」論の総括としてもオススめの一冊である。

最後に読書案内。本書で言及されている左派オートメーション論については、『現代思想』（青土社）二〇一九年六月号を参照。今野晴貴『賃労働の系譜学』（青土社）は、日本固有の労働事情とオートメーション論の接続を試みている。技術発展の政治性や課題の官僚的解決といった論点を掘り下げたい読者には、デヴィッド・グレイバー『官僚制のユートピア』（以文社）を推薦。（りっちゃん）

（二七頁 税込二四二〇円 10月刊）

ありふれた日常を、みつめる。

牛腸茂雄全集

作品編

牛腸茂雄著

赤々舎



私は意識の周辺から吹きあげてくる風に身をまかせ、この見慣れた街の中へと歩みをすすめる。そして往來のきわで写真を撮る。

——『見慣れた街の中で』序文より

写真家、牛腸茂雄（一九四六—一九八三）。幼少期に患った胸椎カリエスにより身体的ハンディキャップを背負いながらも、高校卒業後はデザイナーを目指して上京。専門学校で写真家大辻清司と出会い、写真の才能を見出されると、卒業後は闘病しながら写真家として活動し、三六歳でその短い生涯を終えるまでに三冊の写真集を出版した。死後に再評価の機運が高まり、今年も渋谷で回顧展が開催されるなど、昭和を代表する日本の写真家の一人として今も注目されている。そんな牛腸が生涯に発表した写真集やドローイングなどの六つの作品を、贅沢にも一冊の作品集にまとめたのが本書だ。ずっしりとした、物質としての存在感もあるこの作品集に、一人の写真家のすべてがつまっている。

一九七一年発表の写真集『日々』から本書ははじまる。被写体は高度経済成長期を生きる人びと。白人の家族、子ども、犬、飛行機。

モノクロの写真で淡々と写しだされていくなげないスナップから、欧米の文化が東京のまちに受容され、日常の一部として浸透していく様子が読み取れる。

続く『SELF AND OTHERS』（一九七七）で牛腸は、身近な人びとを写した。近所の子どもたち、友人、家族、被写体となった人びとはみなカメラをみつめていて、その表情はどこか戸惑い、こわばっている。言葉では表しきれない撮影時の複雑な感情が、確かに写されている。鑑賞者は写真を介して撮影者に置き換わり、他者である被写体からみつめられる。作品集のテーマである自己と他者の関係は、このように撮影者と被写体との関係として表現されているが、終盤のセルフポートレートで牛腸自身が写されると、鑑賞者は突如として撮影者である牛腸と対面する。撮影者であるはずの牛腸からみつめられることで、自らが被写体として写真集に閉じこめられるかのような感覚を覚える。写真の持つ、見る側と見られる側の非対称な関係が、そして自己と他者の関係さえもが、揺らぐ。『見慣れた街の中で』（一九八一）では一転し、東京に生きる人びとの姿を、鮮やかなカラー写真で捉えた。低身長だった牛腸が都市の中に溶け込んで撮影したという身体的体験が、ローアングル、フシ、傾きなどの動きのある写真表現から読み取れる。

牛腸の作品に、特別なものは写っていない。しかし、ありふれた日常を切り取っているからこそ、鑑賞者は身近に感じられる作品世界に深くのめりこみ、感性を揺さぶられるのだろう。（たいやき）

（二四八頁 税込八八〇〇円 11月刊）

サザエさんうちあけ話

長谷川町子著
朝日新聞出版

国民的アニメとして人気を誇る「サザエさん」。その漫画原作者である長谷川町子について知っている人はどれくらいいるだろう。

本書は、とにかく絵が好きだった幼少期から、胃を痛めながら漫画を描く作家としての日々までを語るエッセイ集である。彼女の人生は波瀾万丈だ。ひょんな一言から、当時爆発的な人気のあった『のらくろ』の作者、田河水泡の弟子になる。いくつもの雑誌で連載を持つようになるも、戦争の渦に巻き込まれていく。戦後の紙のない時代に姉妹で『サザエさん』を出版にこぎつけたものの、店に並べにくい型だったため全て返品されてしまう……と、こんな調子である。面白おかしい語りに思わず笑ってしまうが、父親を早くに亡くし娘3人と母親での暮らしで、「母の良心的な主義」もあって来月の家賃の貯えはなかったそうだ。

本書には文章と漫画の中間のような特徴的な表現が使われている。「私」や「姉」といった文字の横に、顔が表情豊かに描かれている。また、「バカ」と文中に出てくる箇所にはカバが逆さまに笑っていたりと、文字の合間にこまごまと絵が散りばめられていて視覚的にも楽しい。絵を細部まで描くことで有名な著者は、本書も道端の看板から通行人の表情までもを丁寧に描いている。当時は何気ない描写だったのかもしれないが、現代の私たちが戦前から戦後にかけての日本の暮らしを想像する手がかりとなっている。

旅行や別荘の話をするときも、著者の視線はツアーのメンバーや近所の野良犬などあくまでささやかなものに向けられる。お話の一つ一つがどこか懐かしく優しい、色褪せることのないエッセイ集。

(茫漠)

(130頁 税込1320円)

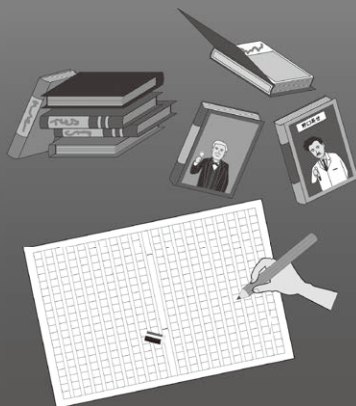


特集

自伝・評伝

私は昔から自伝／評伝が好きでした。難解な哲学書に挑むときも、私はその前にまず、それを書いた哲学者の自伝／評伝に目を通すことが多いです。哲学者の人生の物語を知ること、それまではどこか疎遠なものに思えていた哲学書に、なんだか温かみのあるものが感じられるようになる気がするからです。いわばその本の人間味が増すのです。ともあれ、自伝／評伝は良いものです。それを読み通せば、ひとりの人間の人生を丸ごと追体験することができるのですから。そんなことを可能にしてくれるものは、ほかになかなかありません。

(はや)



マルクス・エンゲルス

vol.1

野口美代子・丸川楠美・中村敬二著
高文研

破天荒で偏屈な奇才・マルクスと、情熱を秘めた心優しい好青年・エンゲルス。二人はどのようにして出会い、『資本論』を書くに至ったのか。



本書は二〇一八年に公開された伝記的映画「カール・マルクス生誕二〇〇年記念作品『マルクス&エンゲルス』」を下敷きに、二人の生涯を描く漫画作品である。

伝記×漫画と聞くと子供向けの学習マンガが想像されるかもしれないが、本書は一味違う。まず漫画を担当する丸川氏は少女漫画家で、マルクスとエンゲルスがとにかくカッコイイ。二人の妻との出会いや結婚までの紆余曲折にはときめくこと間違いなしだ。その上なんとといってもマルクスとエンゲルスの対照的なキャラクター。自由主義者の父の影響を受け我が道を突き進むマルクスと、工場主の息子に生まれ自分の立場に苦悩するエンゲルス。批判屋で怒りっぽいが一途なマルクスと、素直で人当たり良いがプレイボーイな一面もあるエンゲルス。そんな生まれも性格も違う二人が互いを認め合う姿には、少年漫画のような熱い友情が感じられる。

シナリオの面でも、他の思想家との議論のシーンは紙の上だけではなく人間関係を含めて描かれており、ややコミカル&痛快な描写を通じてマルクス&エンゲルスの思想の特徴を分かりやすく掴むことが出来る。また、他の共産主義組織との対立・同盟といった駆け引きや、国家による弾圧や借金取りに追われながら各国を転々とする様子などは、先の読めない展開にワクワクさせられる。

現在①～③巻発売中、完結第④巻は近日発売予定。この機会に一気に読みしてみるのはいかがだろうか。

(りっち〜)

(102頁 税込 715円)

レイモン・サヴィニャック自伝
ビジュアル版レイモン・サヴィニャック著
谷川かおる訳 小学館

「私はモンサヴォン石鹸の牝牛の乳房から生まれた。41歳の時だ。」

彼の名はレイモン・サヴィニャック (1907 - 2002)、フランスを代表するアール・デコのポスター画家だ。



本書の表紙にもなっている牝牛のポスターで一躍有名となったサヴィニャックは、それから50年以上にわたってパリをはじめとする世界中の街をポスターで彩ってきた。一目見ただけで理解できるシンプルな構図と色彩を用い、ユーモラスで機知に富んだ彼の作品たちは、今も多くの人に愛されている。

本書は、そんなサヴィニャックの自伝だ。幼少期を過ごしたパリの下町、あまり身が入らなかった兵役、師匠との出会い、芽が出ず転職と解雇を繰り返す日々、突如訪れる転機と成功、そして人気作家になるという激動の半生が、飾らない素朴な文体で描かれる。金のない人生だったが、彼の周りにはいつも人がいた。両親の経営する食堂の常連や子どもの頃に憧れた自転車競技の選手、兵役を共に耐えた仲間、アール・デコの巨匠であった師匠、そして自らの才能を信じて仕事を回し続けてくれた広告業者の恩人。彼らとの日々が語られる中で、20世紀前半のフランスの日常が浮かび上がってくる。随所で繰り広げられる創作論・ポスター論も興味深い。

また、ビジュアル編と銘打っている通り、本書には彼の作品が70点フルカラーで掲載されている。モンサヴォン牛乳石鹸はもちろん、エールフランスやダンロップタイヤといった代表作に加えて、森永ミルクチョコレート、としまえんなど、日本で手掛けたポスターも見る事ができる。サヴィニャックの世界を隅々まで堪能できる一冊。

(たいやき)

(269頁 税込 4620円)

エリ阿斯・カネッティ

生涯と著作

須藤温子著 月曜社

ノーベル文学賞を受賞しているユダヤ系作家カネッティは、小説『眩暈』（1935）で有名である。そこから一歩進んでこの文人を深掘りすることが、本書の目的には掲げられている。にもか

かわらずこの眼目は徐々に周縁化し、別の作家へと話の中心が移りさえる。しかしその変転し、他者の中に紛れさせる言葉が、作家の本質を何よりも浮き彫りにするのである。

カネッティは「変身」の理を説く。単独の自己で在りつつ異質な他者になり得る力が、個性や権力に執着する近代人の病理に歯止めをかけるからだ。「私」が「私」として生きていることの偶然性を考慮しない者は、誇大妄想や独裁思考に陥りかねない。著者は『眩暈』を同時代言説と比較し、ナチズムに動機づけられた大著『群衆と権力』を分析しながら、カネッティの神髄に迫っていく。

本書が一個人を対象とする評伝でありながら、彼の妻ヴェーザら他の作家にも章を割り当てる理由も、「変身」の観点から推察され得るように思われる。知られざる作家であったヴェーザの生涯と著作に注目することで、夫のエリ阿斯との相違点が明かされると同時に、両者の分かち難い関係性が読み解かれていく。その過程では、エリアスの連作自伝では手つかずのままにされた夫妻のファシズム体験の重要性にも目が向けられる。統一された個の確立に終始しないこの評伝は、結果として非常に固有のかたちで個の「変身」の可能性を読者に披露してくれることだろう。

遺稿研究のために訪れたチュリヒで、著者はカネッティの娘と邂逅する。その経緯が書かれたコラムも含め、様々な人の表情が伝わってくる一冊である。（とよ）

(376頁 税込 3850円)

霧の彼方 須賀敦子

若松英輔著
集英社

先日、三十三間堂を訪れた。まだ夏の気配が残る時期だったが、御堂のなかは奇妙なほどに涼しかった。無数に立ち並ぶ千手観音像を観ながら私が思ったこと、それは自分を表現するためではなく、自分を越えた存在のために何かをつくるとき、その作品は美しいものになるのではないかということだった。須賀敦子の文学は、私にとってそうした作品のひとつである。彼女はその言葉を、何か大いなるものに向けて放っているのではないか。そしてだからこそ、それは美しいのではないか――。

本書は、須賀敦子の「霊性」に迫った記念碑的評伝である。生まれてから死ぬまでの須賀の生涯を「霊性」という視座から描き直してみること、それが本書の目的である。生後すぐにカトリック教会で洗礼を受けた著者の若松氏は、これまで「カトリック批評家」として、様々な人物の生涯を真摯に描き出してきた。本書もその系譜に連なるものであり、本書からは、たんなる「作家」としての須賀ではなく、霊性の道をひとり生きた「キリスト者」としての須賀の姿が浮かび上がる。ここでの霊性とは、超越的なもの＝大いなるものを希求する本能のこと。須賀はこの霊性を内に宿しつつ、感性的世界と霊性的世界のあわいVことどまりながら、死の直前まで言葉を紡ぎ続けた。文学者、思想家、信仰者――須賀のなかには、これら三つの精神が共存している。本書はこの共存のありようを描き出す。

「この作者とは深い交わりになる、作品を読む前からそう感じるものが稀にだがある」と著者は言う。著者にとってその作者とは須賀だった。それは私にとってもそうだったし、あなたにとってもそうかもしれない。（ばや）

(480頁 税込 2970円)



文明開化に抵抗した男

佐田介石 1818-1882

春名徹著 藤原書店

特集の最後に、非常にマイナーだが不思議な人物についての評伝を挙げてみたい。

幕末～明治にかけて、ひたすら「攘夷」を唱えた人がいた。本書で紹介される佐田介石という人物である。幕府側と尊王攘夷側とが激しく争っていた京都の片隅に実は介石もいた。ただし、薩長がやがて倒幕をメインに考えたのに対し、「攘夷」にこだわった介石は次第に時代に取り残された者とみなされるようになったようだ。

明治になると、彼は新政府への批判者として活動を続けた。たとえば政府はキリスト教を弾圧する一方で廃仏毀釈の方針を打ち出して仏教も抑圧した。浄土真宗の僧侶であった介石はこうした政府の姿勢に対する批判も感じていたのだろう。他にも、太陰暦を廃して太陽暦を採用する政策に対して、民心を蔑ろにするものだといった批判については、在野の活動家ならでは鋭さがあるといえる。

彼の主張は時代遅れと思える一方で、不思議に心に訴えかけるものがある。たとえば輸入品を使わず国産品を使うべきだという「ランブ亡国論」などの主張の内容は笑えるものであるが、その底にある、貿易自由化で国内産業が弱体化する、といった観点はこの何十年かの間にも何回も出現していた気がする。

新しい思想を闇雲に高く評価し、無批判にそれに追随するという当時の風潮に対してNoを唱えた人、佐田介石。最後には博覧会で仏教的天動説を実際に見せるカラクリ模型を出展したという。彼の遊説は多数の観客がいたという話からも、西洋がもたらした「近代」に皆諸手を挙げて歓迎したわけではないという一面を知ることができる。(ねこ)

(480頁 税込4840円)



食卓を変えた植物学者

ダニエル・ストーン著

三木直子訳 築地書館

時はアメリカ黄金時代。世界を股にかけ、未知の果物を追い求めるプラントハンターがいた。その男の名はデヴィッド・フェアチャイルド。相棒と共に幾多の苦難を乗り越え、移民の国アメリカの貧しい食卓を改革したのである！

まるでどこかの少年漫画のあらすじのようだが、現実にあったことなのだ。今や手に入らない物は何もないと言っても過言ではないというアメリカだが、ほんの百数十年前までは食べ物といえば移民たちが植民地に持ち込んだ僅かなものしかなかった。そんな貧しい食卓へ鮮やかな彩りをもたらしたのが、本書の主人公フェアチャイルドである。彼は資産家で世界周遊がライフワークのラスロップを相棒に、海路・陸路を縦横無尽に駆け回った。黄熱病で生死を彷徨い、ロバと共に奈落の淵に落ちかけたこともあった。数々の困難に見舞われながらも、彼らは祖国に果物を送り続けた。アボカド、デーツ、シトロン、桜等々。今では当たり前にあるこれらは、全て彼らが世界からハンティングしたものなのだ。波瀾万丈な物語の結晶たちなのである。

後年、結婚したフェアチャイルドは旅をやめ、植物導入事務局の職務に就いた。有望な後継プラントハンターも現れ順風満帆に思えた彼の人生に、影が差す。戦争と検疫法だ。しかも検疫支持者の筆頭が幼馴染みというのだから、ますます物語じみている。バトルの勝敗についてはここでは伏せておこう。

少年漫画のヒーローのような人物だったフェアチャイルド。その目は死ぬまで好奇心に輝いていた。グローバリ化によりどんどん狭くなっている世界の中で、この本を開き、瑞々しく広大な冒険へ繰り出そう。(黄丹)

(392頁 税込3190円)



新刊コーナー

砂丘律

千種創一著
ちくま文庫砂丘律
千種創一著

情勢が変わったのだろうか。首を傾げつつ歌集を開いた私を次の一首が突き刺した——
 〆手のひらの液晶のなか中東が叫んでいるが次、とまります。〆
 バスに乗ってスマホを見る。降車ボタンを誰かが押す。日本では普通の光景だ。一方で、殺し合いが、人種差別が、言論弾圧がスマホのなかでは「普通の光景」だ。その事実が歌をもって知らしめられる。著者はヨルダンで旅人ではなく住人だった。そして、彼が詠むのはそこで生きる人々だ。彼らの生きる世界は本歌集を開けばそこに。

(二八八頁 税込八八〇円 11月刊)

(前髪)

マイ・プレゼント

青山美智子著 U・ku 絵

PHP 研究社



青というのは、他にも増して不思議な色だと思つて。広くて深くて、世界そのものを含んでいるように感じたりもする。空も海も、たぐさんの色を持っているけれど、青の印象が大きくて、生物の始原は青の世界で生まれたのかもと妄想したり。悲しみも爽快

も幸せも、永遠の青い春に秘められている。本著は青の世界を描き書いた本。小説『赤と青のエスキース』の装画家の水彩画と著者のショート・ショートが織り込まれた一冊。
 「私はもつとくに、その小さな亀裂に気がついていた。」

知らないふりで、うまくやっているように取り繕いながら。

私はあえて、それを修繕しないことを選んだ。

傷口のようなその裂け目をもっと大きく開かれていくことを、心のどこかで願っていたのかもしれない。

だって私は、そこから新しい何かが生まれ出てくることを知っている。

少し、こわいけど。」

『裂け目』という名を与えられた一編。濃い青、淡い青、グレーがかった青、赤が混じった青が滲む世界。ところどころに柔らかな黄色が宿る。宇宙と、地球の夜空を切り貼りたい。全然夜風の冷たさはなくて、見ているとじわーとぬくもりが広がる。円をつかって伸びる一筋の線は、優しい薄黄色で幸せな未来を紡ぐ予感。「大切な大切なあなたと私へ」。贈り物にしてほしい作品。

(黄丹)

(一二二頁 税込一七六〇円 7月刊)

〆瓦斯燈を流砂のほとりに植えていき、そうだね、そこを街と呼ぼうか。本歌集はこの一首により読者を誘う——日本、中東またはそのどちらかが混ざり合う世界へと。著者の千種創一氏は東京外国語大学でアラビア語を専攻。卒業後は中東に在住していた。本作は著者初の歌集が文庫化されたものだ。彼の歌は現代短歌に分類されるが、これは三一首のルールを守りつつも従来の短歌より自由な歌を指す。本作の自由さは〆あつ、ピデオになつて〆のような言葉使いや、アラビア語や中国語等の詩が引用される点にある。本作の焦点は主にヨルダンにあり、私の関心もそこにある。なぜなら、昨年京都シネマで上映された、ヨルダンが舞台とされる映画『灼熱の魂』で熾烈な戦いを見て衝撃を受けたからだ。しかし、最近ヨルダンを観光で訪れた知人の様子を見る限り、その影一つない。

ポーランドディア
最後の夏に工藤正廣著
未知谷

私たちはこの世界に生まれ落ち、死んでそこから去ってゆく。それはほんの束

の間の滞在にすぎない。私というひとりの人間がこの世界に生きた痕跡など、すぐさま消えゆくかに思える。しかし、と著者は言う。誰かが私たちのことを憶えていて思い出すかぎり、「歳月はただ単に雲のように流れ去ったのでもなければ、水のように流れ去ったわけでもないと思うのだよ」。誰かが私を記憶する。そして私は死を超えろ。「きみはそのようにして生き残る。生き残って、風に触れ、春に巡り合う」。本書はその記憶の試みである。

戒厳令が解除された一年後、一九八四年のポーランドに、著者はワルシャワ大学の日本語教師として降り立った。任期は一年だった。本書はそのポーランドでの一年間を、小説、物語という形式を通じて甦生させた「現実のおとぎ話」である。著者の化身である主人公のマサリクは、ポーランドで出会った人びとの思い出を、そして彼らの内に秘めやかに

折りたたまれた記憶や歴史を語り出す。「今生きているほうがこのように書くことで、しばしではあっても、愛おしい彼らはこの世に生きるという」希望を込めて。おそらく著者は、本書を通じて、「このような人生もあるということ」を、きっと覚えておいて欲しいと思うのです」という切なる願いに応えようとしているのではないだろうか。私の人生、砂の粒ほどもある人生のひとつが、誰かに記憶され、そしてふいに思い出されること――。

私たちは「みなそれぞれに束の間」だ。だからこそ本書の試みには意味がある。(ばや)

(二三三頁 税込二七五〇円 9月刊)

イタリア料理の誕生

キャロル・ヘルストスキー著
小田原琳・秦泉寺友紀・山手昌樹訳
人文書院



食、それが政治を動かした。本書が語るのは単なる料理の歴史ではない。ファ

シズムの食糧統制が生んだ悲惨な現実と、それに抗おうとする人々の創意工夫、さらには、グローバル化・ファスト化する食の世界における倫理的問題が扱われている。

イタリアの食糧事情には常に欠乏が伴った。統一直後の一九世紀後半から既に、イタリアの民は飢えていた。人口と土地の生産能力が釣り合わない上に、流通システムが機能していなかったのだ。この状況を打開すべく政府は様々な方策を打ち出したが、食糧不足の解決はずっと後、一九五〇年代まで待たねばならない。では、政府は飢えに對しいかなる対策を講じたのか。ファシスト政府は国民に對し、禁欲的な消費こそが健全な栄養摂取の実践に他ならないことを示した。科学者たちによって推奨された消費カロリーは、現代推奨されている値の七割といったところだ。

欠乏が生む負の面がある一方で、貧しさはイタリア料理の基本性質を生んだ。確かにイタリア料理と言われて思い浮かぶものは、シンフルな材料で作られていることが多い。また、限られた材料で少しでも食にパリエーションを出そうとした工夫が、現在の伝統的なイタリア料理にも溶け込んでいるのだ。

飽食・大量消費の時代にあって、多くの人間が食について考えることをやめている。

「空腹は最高の調味料」とはよく言ったものだ。今日はパスタの気分かな、この本を読んで食の未来に想いを巡らせてつつ、じっくりお腹を減らしてみてはいかが。(はらん)

(二二六〇頁 税込三七四〇円 8月刊)

フィンランド 虚像の森

アンッシ・ヨキランタほか著
田中淳夫監訳 上山美保子訳
新泉社



「フィンランド」

その国の名前を聞く
とユートピアのよう
なイメージを抱く人
も多いかもしれない。社会福祉の充実などの
理由から幸福度ランキングやSDGs達成度
ランキングでは常に上位に選ばれている国で
あるからであろう。環境的な社会の推進にも
前向きで、それは林業においても同様であり、
日本の多くの林業関係者はフィンランドの林
業を見本としていくことが多い。しかし、本
書ではその『持続的な』林業、森林に対し、
フィンランドの森林を愛するジャーナリスト
達やカメラマンから疑問を投げた一冊となっ
ている。

全体的には過去、現在、未来へと時間が流
れるノンフィクション本である。かつての美
しい森の状態を、地元住民へのインタビュ
ーから思い起こさせる章もあれば、画一的な樹
木だけを育てた結果、害虫が大量発生してい
るという現在の人工林の課題を深掘りする章
もある。また、林業だけではない新たな森林

との向き合い方を考える章もあり、ページを
進めることで森林が持つ多面的な機能を自然
と理解できる。フィンランドの近現代史を振
り返りつつ、森林の役割を読みやすく綴った
本になっている。

二酸化炭素排出量など画一的な指標の達成
が本場に良い地球環境、持続的な社会を創る
ことにつながるのだろうか。日本はその目標
さえ遠くのような政策を打ち出している。だ
からこそ、環境的側面で一足先にいる国で書
かれた本書から持続可能性の意味をより深く
学べるのではないかと。(投稿・BBM)

(四四五頁 税込三〇八〇円 11月刊)

大いなる錯乱

気候変動と(思考)しえぬもの

アマタウ・ゴーシユ著
三原芳秋・井沼香保里訳 以文社



今年の六月から八

月にかけてのパキス
タンの洪水で三三〇

〇万人が避難を強い

られたと報道されてい
る。そう言われても、
頭に霧がかかったよう
になって被害の規模を
リアルに想像すること
ができない。本書で著
者が「気候変動の危機
はまた文化の危機であ

り、したがって想像力の危機でもある」(一
六頁)と書くのは、そうした意味合いにおい
てだろう。当時SF愛読者の知人すらこう言
っていた。「国土の三分の二が水没する洪水
なんて小説でもありえない」。自身も世界的
な作家であるゴーシユは、本書でこう問いか
ける。なぜ文学は気候危機のリアリティを描
くことに失敗してきたのか？ 彼はその原因
を近代小説の成り立ちそのものの内に見出す。
地域や時代をまたいで多様な文学作品を取上
げ、地質学の歴史なども参照しながら論証を
進めていくその理路は、文学批評としても稀
に見るスリルと射程の広さを備えている。

本書の話題は文学のみならず歴史や政治に
まで及ぶが、ベンガル地方出身なだけあり、
ゴーシユの議論ではとりわけアジア、そして
植民地主義の歴史が大きな位置を占めている。
帝国主義はいかに気候危機と相互に絡まり合
い、気候をめぐる政治を困難なものにしてい
るのか。多様な学問分野を横断しながらその
問いに答えようとする本書は、軍事的な侵略
や占領が止むことを知らず続いている現在の
世界について考える上でも貴重な資源になる
だろう。併録された訳者によるインタビュ
ーも、本編の議論を幅広い文脈へと開いており
勉強になる。(投稿・ドフニ)

(二三六頁 税込二九七〇円 10月刊)

私がつかんだ コモンと民主主義

岸本聡子著
晶文社



国が信じられない
政治が信じられない
役所が信じられない
……「嫌なら出てい
け」。いやそうじゃなくて、もっと良くしたい
ってことなんですけど？

そんな当たり前の思いを抱えつつ、行動に移しかねている学生には、この本をお勧めしたい。著者の岸本は、水道の再公営化をはじめめとする世界中の社会運動に参加し、支援を続けてきた活動家である。その輝かしい実績とは裏腹に、自分の短所について彼女は書き綴る。まず自信がない。お金もあるわけではないし、語学に長けているわけでもない。そんな等身大の自分と向き合った体験と、実践からつかみとられた政治的主張から、本書は構成されている。それゆえに、己の無力さを知る若い世代に寄り添い、応援するような一冊として読むことができるだろう。

「ない」から始まるのが岸本流なのかもしれない。NGOとして資金調達に奔走し、語学力やリーダーシップ向上のために様々なプ

ログラムを試し、得意じゃ「ない」と分かれ
ば他の可能性を模索する。完璧でも十分でも
ない現状をバネにする様が、著者の私的な記
述からも窺え、そしてその姿勢は、簡潔に示
される彼女の公的な理念と不可分であるよう
に思われる。ここでその発言を切り取り引用
することが、はばかれてしまうほどに。

北山エリア再開発や北陸新幹線延伸など、
現在の京都でも数々の社会問題があり、市民
が声を上げ続けている。活動家だった岸本は
昨年東京都の区長となった。力「なき」人々
の奮闘にこそ、未来が「ある」。(とよ)

(二二四頁 税込一七六〇円 7月刊)

概説 教育経済学

松塚ゆかり著
日本評論社



大卒者は多すぎる
——たとえばこんな
「批判」に、印象論
以上の応答を試みる

のなら、本書第4章4節を読もう。「教育過
剩」を世界標準の教育経済学が論じている。
理論と主要テーマを幅広く収めた一冊が来た。
本書が読まれるべき理由の第一である。

評者のみたところ、本書は大別して二部構
成となっている。序論的な第1章から、経済
成長などのマクロ経済、そして諸個人への教
育効果の基礎理論(第2章・第5章)と、教
育費負担や政府の役割をめぐる公共経済学的
議論を検討する第6章までが理論編。民営化
学校選択制、ジェンダー、学び直し、国際化
のそれぞれを扱う第7章から第11章までがテ
ーマ編。第12章は独自の議論も交えた分野の
展望である。いずれも、アダム・スミスから
現代まで、主として英語圏の研究が幅広く参
照され、また、それらを踏まえ日本での事例
にも多々言及されている。この充実っぷりで
税込三三〇〇円というのはちょっとした事件
であると言わねばなるまい。

さて、ここまで書いて言うのも間が悪いが、
評者は著者と面識がある(もちろん、仕込み
客や回し者の類ではない)。本書を読むにつ
れ、——こう呼ばせてもらおう——松塚先生
が、規範理論や歴史研究にも並々ならぬ関心
を払っていたことが思い出された。本書でも
教育機会の平等と公平の問題や、学校教育と
国民形成の問題など、規範的、歴史的、社会
学的議論が随所で参照されている。確かな専
門性に裏付けられた学際指向。これも、本書
が読まれるべき理由に間違いない。(侯爵)

(二二六頁 税込三三〇〇円 8月刊)

新宗教と巨大建築

五十嵐太郎著

青土社

千鳥破風を屋根に配した高層建物が城壁のように立ち並ぶ天理市の街並みや、



粘土のような造形で二八〇メートルの高さをもつPL教団のモニュメントなど、新宗教建築は異質な空気を放っていることが多い。それらの多くは謎に包まれている。本書は、そんな近代以降の宗教建築の空間を、建築史家であり建築批評家としても第一線で活躍している五十嵐太郎が考察するものである。

五十嵐は、新宗教建築は「キッチュ」で「アナクロ」というイメージが人々に植え付けられていることを指摘する。メディアが建築を紹介する際、古建築であれば、歴史的な由緒や価値が説明されるのに対し、新宗教建築で話題になるのはもっぱら建設費用であり、豪華さなどが「うさんくさそうに」語られるという。本書に建築への批評的な描写は少なく、第三者的な立場での語りを重視しているように感じられた。各宗教の歴史を廻りながら、教団の発展とともに思想がどう建築に反

映されてきたかを丁寧を追っている。

「われわれは現代建築や古寺について語る言葉を持っていても、近代以降の宗教建築を考えるための素材を持たない。」と著者は言う。確かに、信者ではない評者にとって、新宗教建築はどこか別世界のものという意識があったかもしれない。ところが本書の後半には、美術館建築と宗教の関係や、式を目的に建てられた「結婚式教会」などより身近な場所についても触れられていて、私たちは決して新宗教と無縁ではないと感じた。宗教と建築空間、宗教と日本の関係を学べる一冊。(正漢)

(四四五頁 税込三〇八〇円 11月刊)

犠牲者意識ナショナリズム

国境を超える「記憶」の戦争

林志弦著 澤田克己訳

東洋経済新報社



まず、評者は本書を読むまで知らなかった。「ヨークの物語」、朝鮮・満州か

らの引揚げ時に日本人女性が現地人に辱められた強姦される話である。日本ではあまり知られていないこの逸話の本が、アメリカで推薦図書として取り上げられ、それに対して在米韓

国人たちが抗議するというエピソードから本書は始まる。

なぜ、この話が問題視されるのか。先の大战における日本＝加害者、朝鮮＝被害者という二分法が、この話の中では逆転してしまうからである。一方では被害者の立場にある者が別の面では加害者となる。似たような例として本書の中では、ナチスドイツに蹂躪された被害者ポーランド人がホロコーストを巡ってはユダヤ人に対して加害者の立場になり、そしてホロコーストによって迫害されたユダヤ人が一方ではイスラエル建国後のパレスチナ人に対し加害を続けていくといった問題を取り上げ、分析を試みる。

たしかに、被害者となった者の苦痛や悲惨の大きさを過小評価してはならない。しかし同時に、加害者となった場合には相手の苦痛にそれだけ誠実に向き合うことが必要である。どちらの方が、といった比較や、どっちもどっち、といった責任放棄のような思考に陥ることなく考えられるか、本書を読むにつれてその難しさを再度認識させられる。

被害者としての意識だけを都合良く記憶に残す、そのような傾向はこれまででも、そして今も続いている。だからこそ、本書が持つ意味合いは大きいと言えるだろう。(ねこ)

(五六〇頁 税込三五一〇円 7月刊)

世界インフレの謎

渡辺努著

講談社現代新書

「ウクライナ侵攻が世界的インフレの主原因」と日本では報道されるが、著者の渡辺努氏は供給不足によって誘発されたと主張する。東大教授の著者が、経済学を専門としない人向けに現状と今後を本書で明快に解説する。

世界がこれまで経験したインフレは需要側に問題があった。例としてはリーマンショック。この時、人々が消費や投資を控えたことでインフレが発生した。ここから中央銀行は買い／売りオペによる制御を会得したが、今の急性インフレには通用しない。なぜなら、パンデミックにより、生産の遅延や労働供給の減少等、供給側の問題で今のインフレが発生しているからだ。また、物価も買上げも起きない慢性デフレという病も日本は抱えている。著者曰く、日本は岐路に立っている——スタグフレーションに陥るか、物価と賃金が適切に上昇する正常な経済軌道に乗るか。

人々のインフレ予想が経済に影響を及ぼすらしいが、だとすれば日本経済の命運は日本で生活する人々に懸かっている。日本で生きている以上、傍観者ではいられない。(前髪)

(二六四頁 税込九九〇円 10月刊)

スピノザ

——読む人の肖像

國分功一郎著 岩波新書

近年刊行された新書の中で最も骨のある新書を一冊選べと言われたら、私は間違いなく本書をあげる。そしてこの本が今ベストセラーになっている現状に、日本社会への一つの確信を手にする。この社会はまだ、「読む力」を失っていないのだと。

スピノザ——近代哲学に圧倒的な影響を与えた哲学者、デカルトとは違うもう一つの合理主義を描いた存在。その射程は広くその思惟は深い。主著『エチカ』は岩波文庫で読めるが、畠田尚志の名訳をもってしても挫折してしまう。ならば本書を伴読本として手にしよう。著者・國分功一郎はその半生をスピノザの読解に捧げている。彼の言葉を通してスピノザの半生、そしてスピノザの読書が見えてくる。スピノザは読む人だった、『デカルトの哲学原理』では徹底的にデカルトを読むことで自身の哲学を作っていた。読むとは時に書く以上に自らを変革する行為となる。

そんなスピノザを國分は読み、その國分の本を我々は読む——読む人の肖像。深い読書体験に人々を導く本だ。

(四三三頁 税込二四〇八円 10月刊)

古代ギリシアの民主制

橋場弦著

岩波新書

古代ギリシア、貴賤に関係なく成年男子市民全員に投票権が認められた社会。順繰りに支配し、支配される関係がそこにはあった。国事に関わる機会が、彼らのすぐ傍に転がっていたのだ。そうした意味で、古代ギリシアでの「民主制(デモクラティア)」とは誰かに教えられる理念などではなく、一人ひとりの人生に直結した「生きるもの」であった。このような観点から、著者は古代の民主制と近代民主主義をはっきりと区別している。

学校教育において民主主義は、政治的進歩として教えられる。しかし、近代民主主義が与っているはずの古代ギリシア民主制が評価され始めたのは、ほんの二世紀前のことである。それ以前には「衆愚政」と揶揄され、ローマ共和制への称讃の陰に隠れていた。本書は古代ギリシアにおける民主制の成立過程と実態を明らかにする試みだが、その特徴は、古代民主制が、近現代民主主義にいかなる遺産を残して／残さずにいるのかを描いていることにある。古代の回顧という新たな視点から民主主義について考えてみよう。(はらん)

(二六八頁 税込九九〇円 9月刊)

美と政治の交錯

コロナ禍においてもっとも注目を浴びた哲学者の一人は、ジョージ・アガンベンだろう。緊急事態宣言が出され人々の移動は制限された。政府がリスクのために人間の生活に大きく関与していく事態にいち早く警戒を示したのがアガンベンであった。人々の命を守ることは大事だが、だからといって社会的生を貶めてはならないと、こうした警告に対して世間の反応は冷やかだった。「アガンベンは命を軽視している」「七〇を超えたかつての思想家の戯言なのだ」と。しかし「これはそう簡単ではない、そしてそのことを理解するためにはアガンベンを読まなくてはならない」。

美と政治の哲学

今月号の特集に倣ってまずは自伝から紹介しよう。『書斎の自画像』（月曜社）はアガンベン自身が書いた半生が綴られている。ハイデガーとの出会い、アーレントとの縁、読んだ作品、出会ってきた絵画、よくみる夢。アガンベンらしく、まるで一つのエッセイ、一つの小説を読んでいるかのように本書は展開していく。自伝というのはこんなにも自由に書けるものなのかという感慨と共に、その自由さにこそアガンベンという人間が現れている。

アガンベンの中で、文学や美学といった事柄と法や政治といった事象はつながっている。多くの作家や芸術作品との出会いが、彼の中で美だけでなく政治を語っていく礎となる。数多の関心領域を知るだけでも本書を読む価値はあるだろう。

続いて紹介したいのは『裸性』（平凡社）である。美の対象であ



り、規制の的となる人間の裸という主題にアガンベンの筆致が光る。

何故私たちは恥らうとともにしか裸になることができないのか。かつてエデンにいた頃裸であることに躊躇いはなかったのに、知恵の実を食べたことで何故私たちは裸を恥ずかしくしてしまったのだろうか。そして人間の身体の中でも、何故顔だけがベールを纏わないまま曝け出されるのだろうか。ことさらに美醜の判断をされながら、裸をめぐるアガンベンの思考は、美学や芸術批評を通しながら深く深く掘り下げられていく。

聖と邪の重複

そしてアガンベンの代表作であり彼の名を世界に知らしめた作品が『ホモ・サケル』（以文社）である。

かつてホモ・サケル（聖なる人間）と称される人達がいた。彼らは人民から排除された人間であり、誰かが殺しても殺人罪に問われることのない人間であった。人でありながらも法の外に置かれる邪な人間がホモ・サケルと呼ばれていた。聖と邪の交錯、法的に規定される非法な部分。こうした境界線の領域にこそ人間の生の営みと法の権力が宿っている。アガンベンはナチス下におけるアウシュヴィッツ、生きながらに死に極限まで近づく収容所を媒介して、ホモ・サケルを近代に提示していく。

収束の見えない感染症の中で、規制権力の方に警戒を呼び掛けた思想家。彼の哲学の中で、ただ生きるのではなく、人として生きることの重要性和限界が示唆される。



経済学の現在地をちらり

アルフレッド・ノーベル記念スウェーデン国立銀行経済学賞、いわゆるノーベル経済学賞の二〇二二年受賞者三人の一人が元FRB議長ベン・バーナンキであったことが一部界隈を賑わせた。経済活動、とりわけ金融危機における銀行の役割についての研究が受賞理由である。選考委員会公表の解説を読むと、バーナンキの業績は理論と実証の両方におけるマクロ経済学の研究として評価されており、他方、同じく受賞者のダグラス・ダイアモンドとフィリップ・ディビッグの業績は情報の経済学やゲーム理論を駆使したミクロ経済学の研究として評価されている（その中核をなす「ダイアモンド・ディビッグ・モデル」の説明は『金融システムの経済学』に詳しい）。また、解説でも言及されているバーナンキの八三年の論文ではダイアモンド・ディビッグのモデルが参照されており、さらに、その一連の実証研究はふたりのモデルを支持するものでもある。今年の受賞者の顔ぶれは、まさしく、経済学におけるミクロ・マクロ総合の進展を象徴しているようにみえるが、では、その核心はなにか。

『経済学と合理性』（岩波書店）は、そのような、経済学におけるミクロ・マクロ総合を論じる。そもそも、ミクロ経済学とマクロ経済学——個人や家計、企業など、経済を構成する個々の主体を分析するか、経済成長や貿易収支など、個々の主体が集散的に構成する経済の総体を分析するか——、この両者には長らく共通の分析手法は存在してこなかった。これに対して、本書は、「合理性の再検討」と（マクロ経済学の）ミクロ的基礎付け」のふたつに着目し、その先にある「標準的経済学」の展望を試みる。第2章まで、経済学史と、ミクロ経済学・ゲーム理論における「合理性」の議論の概観

も実に勉強になるが、本書の「読みどころ」はなんといっても第3章以降である。ミクロ経済学・ゲーム理論における「合理性」の再検討（第3章）から、マクロ経済学における「ミクロ的基礎付け」——各経済部門の同質性を仮定する「代表的個人」の再検討（第4章）、そして、「ミクロ的に基礎付けられた理論・モデル構築とミクロデータの活用を車の両輪として、ミクロ的な現象、マクロ的な現象の研究に進む」「標準的経済学」の展望（第5章）と、理論を押さえつつ、経済学がどのように「合理性」の概念を彫琢してきたのかを解説している。本書を通覧すれば、著者がかつての自身を引き合いに出して述べる「合理的経済人の仮定は非現実的」という（おそらく、ありがちな）「批判」からは卒業である。なお、本書では数式化されたモデルが何度となく登場するが、その前後でしばしば「直感的には」と説明が加えられている。どうかそこまで辿りつこう。あわせて『ミクロ経済学の力』（日本評論社）と『NLASマクロ経済学（新版）』（有斐閣）を……と言いたいところだが、これではほぼ経済学部の新人生である。初学者向けの書籍として『ミクロ経済学入門の入門』（岩波新書）と、本書第4章に出てくる「ソロー・モデル」について『経済数学入門の入門』（岩波新書）の第7章、さらに、本書全般に関わる一冊として『経済学の哲学入門・選好、価値、選択、および厚生』（勁草書房）を挙げよう。その第1部と第Ⅲ部の議論は『経済学と合理性』の第2章と第3章に概ね対応している。経済学の核心、「合理性」を正面から論じる一冊が来た。これを機に、豊穣な経済学の世界に足を踏み入れてみるのも悪くはない。

（侯爵）

編集後記

今月号をもって『綴葉』の活動から離れることにした。私がこの組織に加わったのはパンデミック到来直後であり、慣れない zoom 会議で原稿をチェックし合う先輩委員たちの様子が、いまでも記憶に残っている。その後委員の顔を覚え、何度も退職者を見送り新人を迎え入れ、沢山の書評を書き連ねてきた。

書評のみならず様々な仕事にあたる中で、仲間迷惑をかけ、自分の実力不足を嘆く日も少なくなかった。だが、今日までこの組織に在籍したこと自体に後悔はない。生協職員や読者の方々をはじめ、多くの人々に支えられている『綴葉』は、世界でも希少な執筆の場である。書き手同士が切磋琢磨し、自由に書物の輝きを言葉に織り込む日々を通して、私は自分の書いた文章に、いつしか愛着を覚えるようになっていた。自分の存在を決して肯定できずにいる人間にとって、これは大きな成長だろう。そのような愛を育む時間を与えてくれた集まりに、心から感謝している。今まで本当にありがとうございました。

次の段階として、自分の言葉に恥じない人間となり、言葉と信じ合うような関係を維持していきたい。本誌の使命については、これからの担い手にお任せする。それでは皆様、次号の『綴葉』にもご期待あれ。（とよ）

当てよう！ 図書カード

ワールドカップ、素晴らしい戦いでしたね。今回はサッカーの起源ともいわれる「蹴鞠」についてです。約 1400 年前に中国から伝わった蹴鞠。公家の中には蹴鞠を家業とし、流派を持っている家もありました。その内の 1 つ、飛鳥井家の屋敷跡は以下のどれでしょうか？

1. 上賀茂神社 2. 護王神社
3. 下鴨神社 4. 白峯神宮

（黄丹）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から 5 名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは 3 月 15 日です。



《10月号の解答》 10月号の問題の正解は、4. のアンドロメダ座でした。夏や冬の三大角は有名ですが、秋の四辺形はご存じでしたか。読者カードにもありましたが、去年は皆既月食の紅い月が印象的でしたね。図書カードの当選者は、noa さん、五穀豊穰さん、テスラさん、にし乃さん、ズルズキンさんの 5 名です。当選おめでとうございます。（とよ）

読者がらひつじ

○今回の「魔女トレ」の書評で、「京大生の姿勢が悪い」という内容が書かれていて、自分のことかとドキッとしました。気をつけたいです。
（法科大学院・五穀豊穰）

——認知バイアスが働いているような気がしますが、姿勢改善につながるのなら別にいいですよ。それに、姿勢の悪さが書評にある通り「長く勉強を続けてきた」結果なら、そのまま勲章として誇ってもよいでしょう。

○はじめて手にとったのですが、小冊子と思えない字の密度でおどろきました。積ん読が増えそうな、魅力的な書評をありがとうございます。
（エネルギー科学・ズルズキン）

——この度はどうもありがとうございました。アナログな紙媒体である『綴葉』ならではの出会いを体験して下さったことを、心から嬉しく思います（遠方の方は生協HPでー）。

○特集「あなたの書評が見てみたい」を読んでいると、本の装丁をカバーで隠しておすめコメントだけで選ぶ目かくし書店を連想しました。意外性を求めるわくわく感をくすぐりますね。
（防災研・千日紅）

——たしかに。他薦図書の手紙は、プレゼント交換会みたいで楽しかったです。（とよ）